

SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（シナリオ創出フェーズ）

令和 4 年度採択プロジェクト 事後評価報告書

2025 年（令和 7 年）3 月

研究開発プロジェクト名：性虐待などの被害児が心身の回復につながる医療機関をハブとする CAC(Children's Advocacy Center)モデルの構築

研究代表者：田上 幸治

（神奈川県立病院機構 神奈川県立こども医療センター 臨床研究所 部長）

協働実施者：溝口 史剛（前橋赤十字病院 小児科 副部長）

実施期間：2022 年（令和 4 年）10 月～2024 年（令和 6 年）9 月

総合評価

一定の成果が得られたと評価する。

本プロジェクトは、日本では被害を受けた子どもに優しい環境で対応できる仕組みがないことから、子どもに優しい環境で、聞き取り、診察、心のケアがワンストップで受けられる CAC（Children's Advocacy Center）モデル構築にむけ、医療がハブとなり警察、検察、児童相談所などとの多機関連携を進め、子ども虐待、特に性虐待の被害にあった児への対応の仕組みを変えることを目指すものである。

SDGs 目標の中でも当事者が声を上げづらい児童・若年者への性被害、性虐待への対策の必要性を社会に問う取り組みであり、CAC 設立に向けて多様な関係者への問題提起と行動変容を促すために投じられた一石は評価されるべきであり、研究代表者の熱意と実践力の高さには敬意を表する。所在地である神奈川県において県議会で取り上げられ、知事も対応に乗り出すなど、自治体への働きかけも行われている。今後は未解決課題の困難さに対する効果的な施策の立案と、それを可能にするマネジメント・システムの構築、および人材育成体制の整備が進むことを期待する。

項目評価

1. 目標の妥当性

目標は十分に妥当であったと評価する。

「子どもに対する虐待、搾取およびあらゆる形態の暴力を撲滅する」ために、系統的全身診察の普及、多機関連携（MDT：Multi-Disciplinary Team）促進、CAC モデル確立、および CAC のネットワーク構築に取り組むという目標は、十分に適切であったと評価する。長期的なフォローが必要であるにも関わらず、救援が進んでいない分野であり、被害を受けた子どもが二次被害を受けないよう、医療を中心に、司法、福祉等による MDT において CAC モデルを構築し、全国に広げていくという目標は、SDGs の考え方に則している。今後、その実現に向けたマイルストーンがより具体的になることを期待する。

2. 研究開発プロジェクトの目標の達成状況および研究開発成果

プロジェクトの目標は達成されたと評価する。

系統的全身診察の普及について研修プログラムを作成し、多くの機関から参加者を得てデモ研修の実施に至った。CAC モデルについては、県議会において、行政や警察などによる MDT 体制づくりの必要性について知事の言質を得て、神奈川県版の CAC モデルが動き出している。今後は他の地域でも系統的全身診察の診療ポイント化が実現され、全国に波及することが期待される。また、医療関係者の他、目標達成に必要と思われる被害当事者に近い団体や教育機関、福祉関係者など多様なステークホルダーを加えた研修内容やネットワークの構成など、新たにパッケージ化やユニット化へ発展することを期待する。

3. 研究開発プロジェクトの運営・活動状況

プロジェクトの運営・活動状況は、妥当だったと評価する。

海外からの専門家招へいや継続的な研修の実施により、関係者への啓発や技術普及が進められた。研修プログラムが作成・実施されたこと、医療関係者によるネットワークが構築されつつあることを評価する。一方で、実質的に研究代表者がプロジェクトのほとんどを自ら担っている状態であることから、参加者の役割を明確化すること、さらに今後は、医療関係者以外の参加を促す工夫が進むことを期待する。

4. プロジェクト終了後の事業構想(研究開発成果の活用・展開の可能性)

プロジェクト終了後の事業構想は、概ね描けていると評価する。

研究代表者の CAC 設立への思いは強く、実現への期待も大きい。神奈川版 CAC モデルの実現、性虐待対応拠点病院の構想と行政への働きかけなど長期的な構想も示されており、残された課題と実施すべき項目についても一定程度示された。今後、CAC モデル事業、MDT 促進事業、CAC ネットワーク構築の多地域・多機関連携に向けた具体的な動きや、課題克服への対策、多地域展開を継続的に担い得る体制について整理が進むことを期待する。また、本プログラム・ソリューション創出フェーズの長江プロジェクトとの連携も期待する。

5. その他

なし